

ディマンシュはじめて物語

そもそも“ディマンシュ”なるものが生まれたのは、今を去ること10年前、昭和51年の暮れも押し迫った頃、ある学習院大生の思いつきによる。その学生こそ誰であろう、現在までディマンシュの指揮者として10年間棒を振り続けている山本誠一郎その人なのである。“ディマンシュ”というのはフランス語で“日曜日”のことであるが、練習日が日曜日であることから、彼が名付けたものである。当時上智大学のオーケストラに所属していた小生はヴァイオリンのM氏から、「学習院大学のオーケストラのトラ(エキストラのこと)を集めるように頼まれているのだけれどやってくれない。」と持ちかけられ、気軽に引き受けたのであった。ところが、最初の練習に行ってみると、そこにいるのはほんの数人程度で、“トラ”どころか、ヴィオラなど小生一人であった。騙された?と思ったときには後の祭だった。(実際は取り次いだM氏が間違えたらしい。) こうしてディマンシュという泥沼に第1歩を踏み込んでしまったのである。

冬休みを返上しての練習の結果、翌52年、新年早々の1月7日、記念すべき第1回演奏会が開催されたのである。プログラムはすべてバッハの作品、演奏者は13人、聴衆は20人を数えるほどであり、結果は惨たんたるものであった。フーガで1小節遅れて出たヴィオラを初め、すべての曲が失敗の連続で、とても人に聞かせられるような演奏ではなかった。(小生などはこのときからバッハ恐怖症となり、バッハを演奏すると必ず間違えるというジンクスにつきまわっている。)そして、誰もがこの失敗を機にディマンシュはこれでおしまいだと思った。ところが、一人だけそう思わなかった人間がいたわけで(もちろんディマンシュの発案者である)、執念深いというか、何というか、毎日のように午後8時45分ころ、丁度テレビドラマがクライマックスを迎える時間帯に電話をかけてきては、「第2回めをやりたい。」ともちかけた。とにかく話し合おうということで、上智大学前の土手の上でチェロのS氏、コントラバスのS氏、指揮者、そして小生他数人が集まって話しあった。これがディマンシュ史上、その運命を決定づける重要な会談となった“土手の上の会談”である。チェロのS氏は「やろう。やろう。」と積極派、小生は当然「二度とやりたくない。」と反対派、コントラバスのS氏は「どちらでもよい。」といういいかげんな意見(この性格は今でも直っていない。)だった。結局、指揮者の旨い口車にのせられて、「小編成でもよいかからオーケストラ形式にする」という条件付で第2回演奏会を開催することになった。(一番積極的だったチェロのS氏は第2回以降参加せず、一番反対していた小生が現在まで残っているといえるのだから世の中わからない。)

第2回演奏会は翌53年1月15日にモーツァルトの作品ばかりを集めて行われた。この時はメンバーも26人と、小さいながらもオーケストラ(管楽器はオーボエ、ホルンにフルートという編成だった。)としての第1歩を踏むこととなったのである。(アンサンブルという名はそのまま残した。)そして演奏会としても比較的好評であり、ディマンシュは第3回へと続いていくのである。第3回では、メンバーも35人に増え、演奏会もこの時から年2回のペースとなった。また、この頃から、メンバーを集めるため、指揮者と現コンマスによる涙ぐましい“青田刈り作戦”(各大学のオーケストラの練習場へ出沒し、目ぼしい人間を直接勧誘する方法。)が展開された。

続く第4回は、主要メンバーが就職戦線で参加できず、一部の暇な?人々によるバロック演奏会で、主要メンバーの欠けるこの演奏会はディマンシュの演奏会としては正式に承認されていない。したがって第4回演奏会は永久欠番であるというのが通説である。

主要メンバーの就職戦線も終わった昭和54年、再び招集され、9月には第5回演奏会を行った。第5回ではメンバーも40人程になり、一部の曲にドラムペットとティンパニを加え、続く第6回では、メインに初めてベートーヴェンの交響曲(第1番)を演奏し、完全2管編成としてほぼ現在の形となった。ヴィオラをチェロの外側にしたのもこの時からである。第8回では、シューマンの交響曲第1番を取り上げ、初めてトロンボーンを加え、小編成でもいろいろな曲をやっていくという方針を示した。

昭和57年1月23日には第10回記念演奏会が行われ、ベートーヴェンの《エロイカ》が演奏された。会場が“こまばエミナース”となったのもこの時からである。また、この年はディマンシュが生まれてから5周年に当たり、記念パーティも開催された。続く第11回は合唱団とのジョイントでモーツァルトのレクイエムを演奏した。

こうして、年に2つの節目をきざみつつ、ついに第20回の演奏会を迎えるわけであるが、同時に10周年の年に当たり、ディマンシュにとって記念すべき年となったのである。

仕事や家庭の都合でやめざるを得ないメンバーも多い。その度に“芋づる式団員勧誘法”(新しく入ったメンバーがまた別の人間をつれてくるねずみ溝のような方法)でメンバーの確保に努めてきたが、なかなかそれも難しい状況になってきている。また、最近では練習場の確保難などアマチュアオーケストラにとっては前途多難である。果たしてディマンシュは、第30回、第40回の演奏会を迎えることができるのだろうか。

砂上の楼閣を崩すことはたやすいものである。

—つづく—